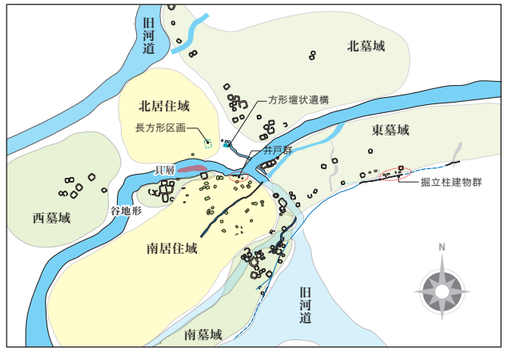
その頃朝日遺跡は・・・

一色青海遺跡に集落が営まれていた頃、朝日遺跡でも大きな変化が起こっていました。まず、集落には環濠がなくなり、居住域、墓域が小グループに分散しました。古い墓を壊して新しい墓が造られるなど、それまで数百年にわたって受け継がれてきた集落の連続性が失われてしまったのです。また、谷を中心に広がる砂層（T-SA層）は洪水による堆積と考えられ、弥生中期末（B.C.1c）の急激な気候変動と関係するものかもしれません。



8-1 弥生時代中期後葉の朝日遺跡

横方向に配された鋸歯（きょし）状文・斜行線文の文様帯の間に頭部を左に向けて連続するシカの絵が描かれています。

8-2 ◎シカが描かれた筒形土製品（弥生中期後葉／本館蔵）

8-4 弥生時代中期末に堆積した砂層

8-3 ◎円窓付土器（弥生中期後葉／本館蔵）

8-5
大型の臼（く）を刳（く）り抜（ぬ）いて作られた井戸枠

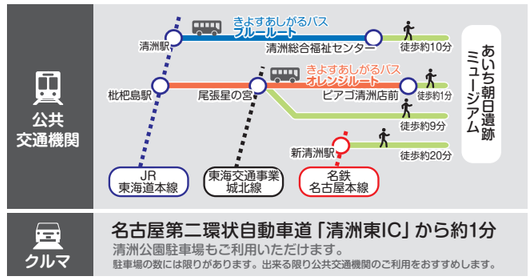
8-1·3：本館　8-2·4·5：愛知県埋蔵文化財センター

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地　■ TEL：052-409-1467　■ 駐車場 15 台

企画展
一色青海遺跡−100 年の弥生ムラ−
編集・発行
あいち朝日遺跡ミュージアム
2022（令和4）年4月29日

AICHI ASAHI SITE MUSEUM
あいち朝日遺跡ミュージアム



はじめに

一色青海遺跡は、愛知県稲沢市に所在する弥生時代の集落遺跡です。発掘調査は、県道の建設、日光川上流浄化センターの建設及び拡充事業にともない、1990年代から愛知県埋蔵文化財センターが実施してきました。これまでの調査面積は約4万㎡に及び、弥生時代集落のほぼ全容が明らかになっています。この集落は、紀元前1世紀を中心とする100年程しか続きませんが、主軸17.6mもある巨大な掘立柱建物をはじめ、赤彩でシカを描いた土製容器、木器の未成品や編組製品（カゴなどの編み物）など、注目される資料が出土しています。濃尾平野の拠点的な集落の一つとして、弥生時代の社会を知るうえでも重要な遺跡です。

本企画展では、発掘調査によって明らかになってきた一色青海遺跡の姿を紹介します。

目次

はじめに …… 2

一色青海遺跡の概要 …… 3

■大型掘立柱建物

一色青海遺跡の全体図 …… 4

一色青海遺跡の出土品 …… 6

■シカの絵画　■石器・石製品

■木器・木製品　■土器・土製品

■編組製品

気候変動と一色青海遺跡 …… 7

その頃朝日遺跡は… …… 8

1. 一色青海遺跡　**2**. 朝日遺跡

2-1　遺跡位置図

凡例

・本書は2022年4月29日から6月26日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「一色青海遺跡－100年の弥生ムラ－」の展示パンフレットである。

・本書の構成と実際の展示構成とは異なる部分がある。

・本書の時期区分は、弥生時代中期をB.C.4～B.C.1cとし、中期後葉をB.C.2～B.C.1cとするが、各地域の並行関係は厳密なものではない。

・掲載資料のうち重要文化財には「◎」を付している。

・掲載写真・図等のうち、とくに記載のないものは、本ミュージアム所蔵である。また、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター提供のものは、「愛知県埋蔵文化財センター」と記載している。

・本書の執筆・編集は、原田幹が行った。

・本展覧会の開催にあたり、下記の機関・個人から協力を得た。

愛知県埋蔵文化財センター、愛知県埋蔵文化財調査センター、城ヶ谷和宏、鈴木惠介、樋上昇、深澤芳樹、堀木真美子

参考文献

愛知県埋蔵文化財センター 1998『一色青海遺跡』

愛知県埋蔵文化財センター 2008『一色青海遺跡Ⅱ』

愛知県埋蔵文化財センター 2014『一色青海遺跡Ⅲ』

中塚武 2021『酸素同位体比年輪年代法－先史・古代の暦年と天候を編む』同成社

樋上昇 2020『東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動』『気候変動から読み直す日本史3　先史・古代の気候と社会変化』中塚武監修　臨川書店

表紙　大型掘立柱建物：愛知県埋蔵文化財センター　シカが描かれた筒形土製品：本館撮影

一色青海遺跡の概要

一色青海遺跡は、濃尾平野の南西部、三宅川と日光川に挟まれた沖積地の微高地上に立地しています。集落は、弥生時代中期後葉、紀元前2世紀半ばから紀元前1世紀半ばにかけてのおよそ100年間営まれました。比較的短命な集落でしたが、これまで発掘調査で確認された遺構は、自然河道、多数の溝の他、竪穴建物約280棟、掘立柱建物約30棟、方形周溝墓約40基に及びます。なかでも大型掘立柱建物SB017は、弥生時代中期としては東日本で最大規模の建物でした。この時期の濃尾平野低地部の遺跡としては、朝日遺跡に次ぐ大集落です。

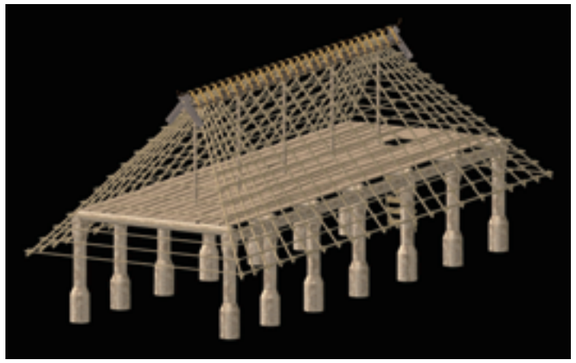
3-1　一色青海遺跡（西から）

出土品にも注目すべきものがあります。シカが描かれた筒形土製品や土製垂飾、勾玉や管玉などの装飾品、また、地下水位が高いことから木製品の保存状態もよく、網カゴなどの編組製品やその素材も出土しています。

一色青海遺跡が営まれた弥生時代中期後葉は、新しい集落が増えるなど地域社会が大きく変化した時期です。土器の形など西日本から強い影響を受ける一方で、台付甕や円窓付土器など、この地域の特徴的な文化が生み出された時期でもあります。一色青海遺跡の土器や建物には、尾張地域だけでなく、伊勢地域や西三河地域との関係もうかがえ、人の動きも活発だったようです。また、最新の研究では、遺跡が衰退する紀元前1世紀半ばに、急激な気候の寒冷化・湿潤化が進行し、自然環境に大きな変化がおこったこともわかってきました。一色青海遺跡は、尾張地域における弥生社会の大きなうねりのなかで花開いた一刻の大集落だったのです。

■ 大型掘立柱建物

3-2　大型掘立柱建物



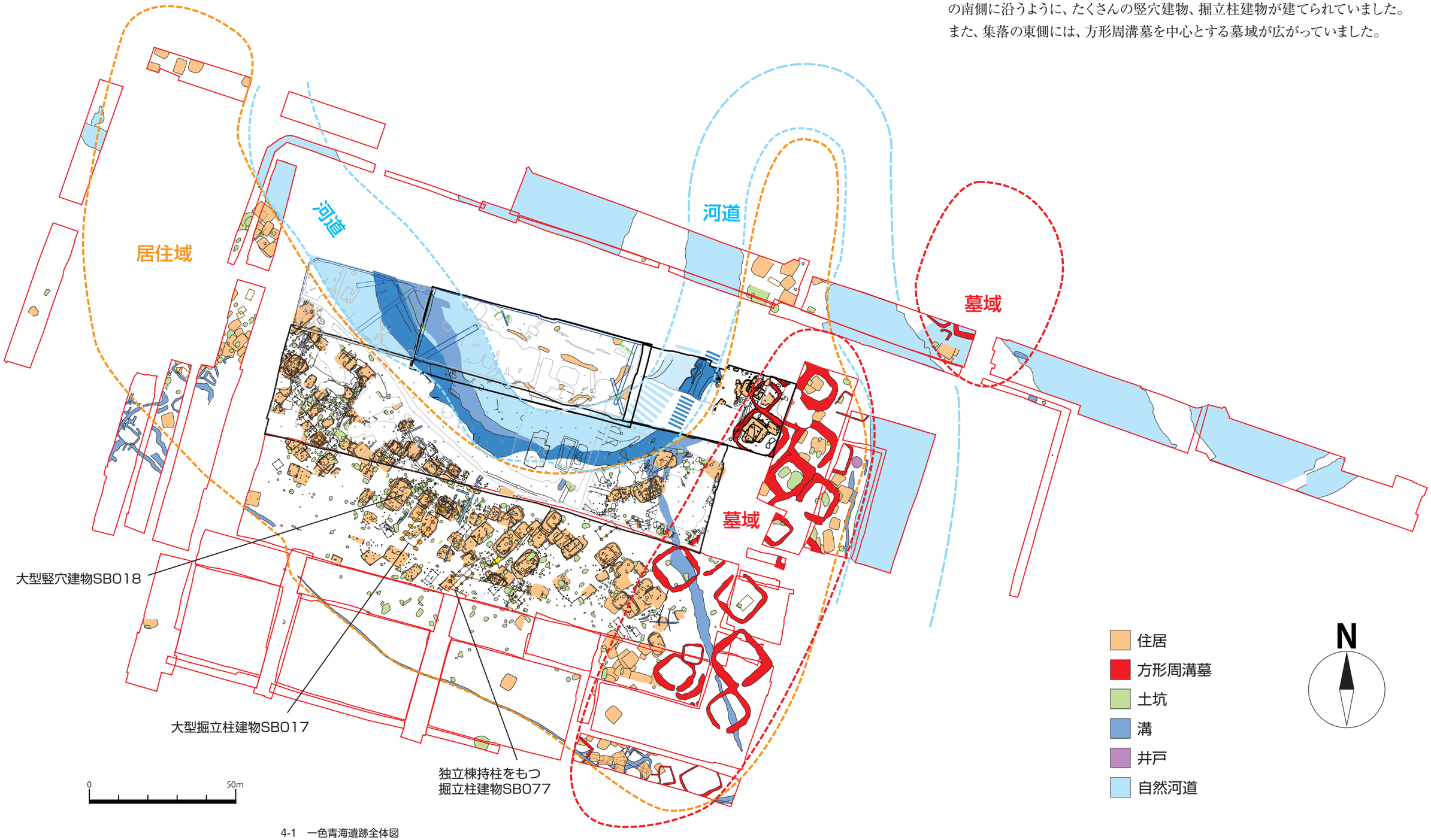
3-3　大型掘立柱建物の復元図

SB017は6×1間の掘立柱建物で、長軸が17.6m、短軸が5.1m、建物面積は89.8㎡もあります。柱穴には、柱が沈まないよう礎板が敷かれたものもありました。また、この建物の西側には、非常に大きな竪穴建物SB018が建てられていました。これらの建物は、集落全体でもシンボリックな意味をもっていたと考えられます。

2-1：本館　3-1～ 3：愛知県埋蔵文化財センター

一色青海遺跡の全体図

集落の北側には、西から東へ大きく蛇行しながら自然河道が流れ、この流路の南側に沿うように、たくさんの竪穴建物、掘立柱建物が建てられていました。また、集落の東側には、方形周溝墓を中心とする墓域が広がっていました。



4-1　一色青海遺跡全体図

4-1:愛知県埋蔵文化財センター

一色青海遺跡の出土品

■ シカの絵画

6-1 シカが描かれた筒形土製品
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）

筒形の土製容器に、赤い顔料で、縦に連続して6頭のシカが描かれています。絵は通常線刻で描かれることから、本例はきわめて珍しいものです。

一色青海遺跡では、弥生時代中期後葉を中心とする土器・土製品、石器・石製品、木器・木製品など多彩な遺物が出土しています。ここでは企画展の展示品から代表的なものを紹介します。

土製の垂飾（すいしょく）（ペンダント）にシカが線刻されています。

6-2 シカが描かれた土製垂飾
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）

■ 石器･石製品

6-3 勾玉(左)と管玉(右)
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）

■ 木器･木製品

6-4 板
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）
大型掘立柱建物の柱穴から出土。柱を支える礎板として使用されたものです。

■ 土器･土製品

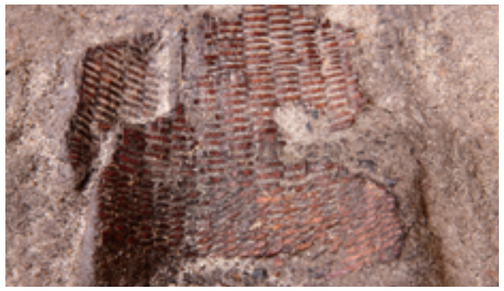
6-5 円窓付土器
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）
体部に大きな丸い孔があけられた壺形土器。

6-6 台付細頸壺
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）
西日本の影響を強く受けた凹線文（おうせんもん）系土器の細頸壺。

6-1･3･6：本館　6-2･4･5：愛知県埋蔵文化財センター　7-1～3：愛知県埋蔵文化財センター、7-4：樋上2020

■編組製品とその素材

7-1 編組製品
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）



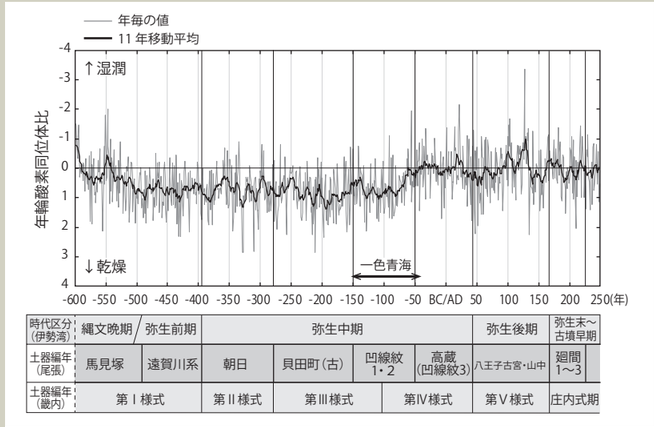
7-2 編組製品
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）

7-3 編組製品素材
（弥生中期後葉／愛知県埋蔵文化財調査センター蔵）

自然流路などから編組製品（カゴなどの編み物）が出土しました。7-1･7-2は竹笹類で編まれたカゴで、赤く彩色されています。7-3は編み物の素材を丸めたもの。弥生時代の編み物の技術を知るうえで重要な資料です。

気候変動と一色青海遺跡

名古屋大学の中塚武が中心となって取り組んできたこの研究（中塚2021）は、木材の年輪セルロースに含まれる酸素同位体（さんそどういたい）の変動パターンが降水量の変化を反映していることに基づき、過去数千年間にわたる年単位での降水量・気温の変動パターンを明らかにしました。この変動パターンを弥生時代の編年、集落の動態と重ね合わせることで、気候変動が弥生社会にあたえた影響を議論できるようになったのです。右のグラフのように、弥生時代前期末から中期中葉までは、比較的乾燥（温暖）した状態が続いていました。ところが、中期後葉から後期にかけて急速に湿潤（寒冷）化が進んだことがわかってきました。この気候変動は、一色青海遺跡や朝日遺跡の集落動態にも大きな影響をあたえたと考えられます。



7-4 年輪酸素同位体比による気候変動パターンと尾張地域の土器編年